

大学の授業にフィリピン人教員による オンラインレッスンを導入する意義—実証実験より

The Significance of Incorporating On-line Lessons Conducted by Filipino Teachers into University English Curriculum: A Substantiative Experiment

東洋英和女学院大学国際社会学部 竹下裕子

1. はじめに

産学連携によるグローバル人材育成推進会議は、2011年4月、「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」のなかで、グローバル人材を「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」(p. 3)と定義した。そのうえで、このような日本人の育成とは逆行するとも言える若者の「内向き志向」を憂い、国を挙げた外国人留学生獲得の必要性を説き、高等教育における国際化戦略の明確化を求め、その達成のためには産学官の協働が重要であると主張した。

推進会議の戦略が重視する、留学などを通じた日本人大学生の海外経験と外国人留学生の獲得のために提案されている事柄には、次の2点が含まれている。

4. 具体的方策

(1) 大学の役割

- ③「日本人学生の海外留学を後押しする」
 - ・実用的な外国語教育の実施
日本人学生の語学力向上を図るため、参加型・対話型・課題解決型の授業を行うとともに、TOEFL、TOEIC等の活用により学生の語学力の評価の徹底を図る。
- ④「優れた外国人留学生を獲得する」
 - ・魅力ある教育プログラムの設定
教育内容、指導教員、指導体制等の充実を図り、外国人留学生にとって魅力ある教育プログラムを設定する。
 - ・外国語コースの設定や外国語による授業の推進（再掲）
外国人留学生が日本で学びやすい環境を整備するとともに、日本人学生が語学力の向上を図る観点から、外国語コースの設定や外国語による授業を推進する。

(pp. 7-8)

上の方針に賛同するか否か、あるいはどの程度迎合するべきか、そしてどの程度即座に行動に移すべきかという議論は他の機会を待つこととする。そのうえで、多様な留学制度を設置し、外国人留学生を歓迎し、英語を主専攻とする学部学科がないにもかかわらず英語教育に力を入れ、英語教員の養成も行なう東洋英和女学院大学において、海外留学に依存することなく「グローバル人材の育成」に貢献する方法を探りたいという思いが、本稿の実証実験講座の導入のきっかけであった。

「日本人学生の海外留学を後押しする」ために、海外留学に耐えうる語学運用能力を身につけるた

めの実用的な外国語教育の実施が有効であろう。また、「優れた外国人留学生を獲得する」ためには日本語以外の教育言語により運営される授業の設置が不可欠であるが、そのような授業が日本人学生の学びにも貢献するためには、日本人学生に語学力が備わっていなければならない。多くの留学生を招致できるような日本語以外の言語で指導する授業を豊富に提供することができ、留学生とともに外国語で学ぶことのできる日本人学生がいれば、日本人学生にとっても、留学するに匹敵するような豊かな言語活動を通じた学びを実現できるはずである。それが可能となれば、国内においても、さまざまな文化的背景をもった多様な英語に触れながら、異文化間コミュニケーションを通じた学びさえ期待することができる。

加えて、高等学校の外国語（英語）指導の目標が「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」（文部科学省、2009、p. 87）ことであり、高校生がこの目標に向かった指導のもとに英語学習を積んだ上で大学生となったならば、この目標が達成されていることを確認し、達成が確認できない学生を援助し、この目標の延長線上に大学における英語学習の目標のひとつを設定するべきであると考えたことも、本稿の実証実験講座の導入の動機となった。

具体的には、アジア人留学生を含む少人数のクラスにおいて、日本人教員（筆者）の全体指導に加え、フィリピン人教員による一対一の英語指導を部分的に導入した。このことにより、日本人の英語、フィリピン人の英語、そして日本人でもフィリピン人でもないアジア人留学生の英語によるコミュニケーション環境において、アジアにおける多様な英語と文化的な特徴や差異にも意識を向けながら、非常に集中した環境のもとで学生の英語運用能力の向上をめざすという試みを実践した。

2. 実践方法

2. 1 授業概要

本稿の基となった授業、Advanced English A/AI は、2016 年度前期に、次のとおりのシラバスを提示して実施した。

表 1 : Advanced English A/AI (2016 年度) シラバス

授業名	Advanced English A/AI		
開講期間	前期	曜日時限	火曜 2 限
単位数	1	配当年次	3
テーマ・内容	<p>この授業では、将来的な英語使用に対する積極的な姿勢と具体的な目的をもつために、英語運用能力を向上させる訓練をします。授業の一部にオンライン英会話を導入し、学生が言語活動に関する展望を描きながら自主的に設定した目標のもと、実践的に英語を使用します。それにより、受験対策指導を行なうことなく、結果的に標準化テストのスコアの向上を期待します。</p> <p>通常大学の英語の授業では、教員による授業全体の目標は設定されとしても、個々の学生のニーズに合った目標設定を学生個人がすることは難しく、20～30 人の集団の作業のなかでは、異なる個々のニーズを明確に意識して個人が学習を進めるということは現実的ではありません。よって、本授業では、学生に「考えること」と「実践的に英語を使用すること」の機会を十分に与えることにより、これを可能にすることを目的とします。</p>		
到達目標	<p>すべての学生が、英語運用能力について、現在の立ち位置を認識し、そこから向上することをめざします。授業開始時と終了時にそれぞれ英語運用能力を確認するテストを受けますが、そのテストの受験対策をすることなく、「話す力」を集中的に伸ばす訓練をすることを中心に、語彙の増強や読解力の向上も結果的にめざすような形で、総合的な英語力を高めることを目標とします。</p>		

学習内容	<p>日本人の英語力が、英語を公用語としない他のアジア諸国と比較しても低いと言われるのには、英語学習の機会が豊富であるにもかかわらず、英語使用の機会は非常に乏しいことが主な理由であるという前提に立ちます。そのうえで本授業では、Callan Method のプロフェッショナルであるフィリピンの英語教員と学生を、スカイプを通じて一対一で結び、集中的で緻密に管理された発話の特訓を行なうこと（授業内 50 分）で英語使用の環境を作り、発話に対する恐怖心を払拭し、英語を実践的に使用すればこれまで蓄積してきた英語の知識を活用することができるという自信を与え、英語使用に対する積極的な姿勢を築きながら、英語運用能力の向上をめざします。</p> <p>毎回の授業内のオンラインレッスンは無料で提供します。集団の作業とは異なり、他者が入り込めない一対一の極限状態における学習においては、フィリピン教員は学生の実力を十分に把握しながら指導し、学生は自身の弱点を痛感すると同時に、達成感も得ることが可能です。毎回のオンラインレッスンの評価は、教員もちろんですが、学習者本人も行なうこととなります。毎回のフィリピン教員とのレッスン終了後、授業の担当教員は、学生が 50 分間の作業を客観的に顧みることができるように導き、個々の学生が設定した目標の実現に向けた自身の努力の必要性和短期的な目標設定の修正の必要性を認識することができるような機会を与えます。</p>
授業時間外の学習	毎回のオンライン授業終了後、振り返りと次の目標設定の時間を設けますので、その内容に応じて、次の授業までに指示された必要な準備を行なうことを望みます。準備の内容は、個々の学生の学習の進行状況に応じて異なります。
成績評価の方法・基準	授業の開始時と終了時に英語運用能力テスト（CASEC ⁱ ）を受験します。授業で行なうオンラインによる英語の特訓において、英語力を伸ばすことをめざすため、授業に対する取り組みの真剣さと、授業を通じた英語運用能力の伸びを、総合的に判断し、成績を評価します。
履修者への要望	英語学習の進度は問いません。毎回の授業で一対一のオンラインレッスンを行ないますので、授業を休むことなく、真剣に英語運用能力を向上させることを希望する学生のみ履修を求めます。
履修条件	オンラインレッスンの契約との関係で、履修者を 15 名以下に限定します。履修希望者が多い場合、抽選を行ないますので、第 1 回の授業に必ず出席して下さい。
教科書	指定しません ⁱⁱ 。
参考書	個々の学生のニーズに応じて、授業中に提示します。
参考 URL	カランメソッドによる英語指導 http://www.qqeng.com/lesson/callan_method.html QQ English http://www.qqeng.com/
授業計画第 1 回	
授業内容	履修者の確定とオリエンテーション
授業計画第 2 回	
授業内容	オンラインレッスン開始前の英語運用能力テスト受験
授業計画第 3 回～14 回 ⁱⁱⁱ	
授業内容	オンラインレッスン事前準備 オンラインレッスン 50 分 オンラインレッスン事後振り返り
授業計画第 15 回	
授業内容	オンラインレッスン 50 分 オンラインレッスンを通じた学びと目標達成に関する振り返り
備考	オンラインレッスン修了後の標準化テスト受験は定期試験期間中に行ないません。 毎回 50 分のオンラインレッスンは、提供元のご好意により ^{iv} 、無料です。 授業開始時と終了時のテストの受験には、それぞれ 3,456 円 かかります。この受験料のみ、学生の自己負担とさせていただきます。

上のシラバスから、学生は、90 分授業の一部をフィリピン人の英語教員がオンラインで担当することと、授業には有償の外部テストが導入されることの 2 点を了承したうえで、履修を希望した。オンラインレッスンは、通算 14 回実施した^v。シラバスに表れた 13 回に加え、ゴールデンウィーク中の授業相当日、学生はそれぞれのインターネット環境において、通常のレッスンを受講した。

オンラインレッスンの前後に、事前と事後指導を設けた。事前指導では主に前週の学びの復習と当該週の学びへの目標設定を各自が行ない、事後指導ではレッスンの学びの復習と振り返りを行なった。

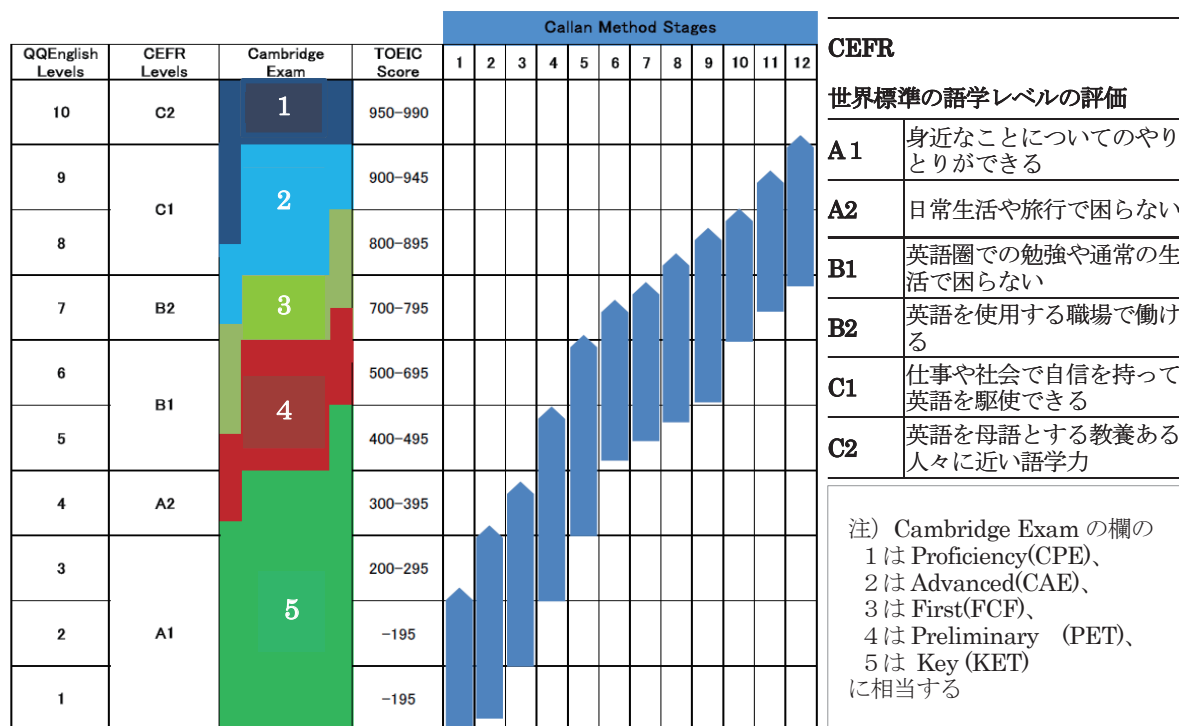
事後の復習には、学生がペアまたはトリオで、各自の学びを共有し、教員の立場に立って学びの一部を相手に提供するというアクティビティを含むこともあった。別の機会には、レッスンを振り返り、その経験を英語で語り、録音して提出、あるいは同じ内容を英語で記述し、ワード文書として提出し、科目担当教員がフィードバックを行なうこともあった。科目担当教員が作成した設問に答えを記入する形式の振り返りシートの記入は欠かさなかった^{vi}。

外部テスト（CASEC）のスコアに関しては、オンラインレッスン開始前には、現状に関する指標が必要であるので受験し、レッスン終了時には、オンラインレッスンの効果と同じ指標をもちいて観察するために再度受験するのであり、CASEC スコアの向上が本科目の主たる目的ではないことを授業開始時に学生は承知していた。ただし、レッスンの受講には、外部テストが必ず必要であるというわけではなく、レッスン開始時に学生が受験する QQ English 社のアセスメントテストの結果だけでも、レッスンは円滑に進行する。

2. 2 オンラインレッスン概要

90分の授業のうち、事前・事後指導を除く50分間、Skypeを通じてフィリピンのQQ English 専任教員によるレッスンを14週連続で受講した。Skypeでは、教員と学生がスクリーン上で対面するため、ヘッドフォンを通した音声はもちろんのこと、教員の発話の際の口や表情を鮮明に見ることができ、音声だけでは理解が不十分であると教員が判断した場合には、チャットボックスを利用した文字データのやり取りを通じた視覚的な理解の強化も行なった。聴覚と視覚が十分に活用されたレッスン形式であった。

グラフ1：カランメソッドの12ステージ—他の検定等との比較



(QQ English 社作成)

レッスンには、指定のテキストがもちいられた。カランメソッドは、グラフ1のとおり、12のステージから構成されており、各ステージに1冊のテキストが指定されていた。すべての学生がステージ1から *Callan Method Student's Book—Stage 1* をもちいて学習を開始した。1, 2年次の英語の進度別クラス編成において、履修学生が所属したレベルはまちまちで、2, 3で示す通り、学生が申告した英語運用能力も一定ではなく、そもそも、「運用能力」を示すとされる検定等の受験の有無、受験時期や目的も異なり、さらに受講開始直前に受講した CASEC においても、学生が示した英語力には大きな差があった。それにもかかわらず、履修学生全員が、同一のテキストをもちいて学習開始したが、レッスンが進むにつれて、フィリピン人教員の判断のもと、進度の差別化が図られていった。

オンラインレッスンの流れは次のとおりであった。

- 1) ウォーミングアップ : Skype の映像や音声の確認を含め、教員と学生が自由な会話を交わす
- 2) レッスン
 - ① 前回の復習 : レッスン時間の 40-50%程度
 - ② 新出単語の説明 : 教員は新出単語の説明と文法の説明を与え、学生はリスニングのみでそれを理解することに努める
 - ③ 質疑応答 : 教員は同一の質問を 2 度繰り返した後に、学生の返答を求める。返答が円滑でない場合、教員が誘導する返答をシャドーイングする形で発話する
 - ④ 読み取りと書き取り : 復習のための教科書のリーディングと文章のディクテーションを一定の間隔で行なうが、必ずしも毎回行われるわけではない。
- 3) クロージング : 挨拶などを交わしてレッスンを終了する
- 4) レッスン履歴の確認 : 教員が記載するレッスン履歴をもちいて、その日の学びの復習や次週のレッスンに向けた予習を行なう。

表2は、ある日のレッスンの内容をフィリピン人教員が記録し、ウェブサイト上で受講者と共有したもので、科目担当教員は学習管理者として、同一ページを閲覧することができた。教員によって記載方法に多少の差異があるが、受講学生と管理者に向けた情報としては十分である。

表2 : フィリピン人教員が記載したレッスン履歴例

学生	教員	ステータス	レッスン履歴
A	L----	1	TIME STARTED: 11:00 JT TOPIC: Full Book Revision Stage 1 pp. 12-52 and Callan Method Stage 2 pp. 53-62 NEXT TOPIC: Stage 2 p. 65 (About how many things..?) READING: none DICTATION: We did Dictation 2.
B	M----	2 ^{vii}	See you soon.
C	S----	1	TOPIC: CALLAN METHOD Stage 1 p.42- 50 NEXT TOPIC: Stage 1; do Lesson 6 on p. 29 then NEW WORK on p.42(name) READING: Lesson 5 DICTATION: Dictation 1
D	C----	1	TIME STARTED: 11:00 JT TOPIC: CALLAN METHOD; FULL BOOK REVISION Stage 1 pp. 3-52 and NW Stage 2 pp. 53-59 NEXT TOPIC: Stage 2 p. 60 (PRESENT SIMPLE- QUESTIONS READING: None DICTATION: None

E	J----	1	Time Started: 11:00 AM JT Topic: Callan Method Stage 1 pp. 43-51 Next Topic: Read Lesson 6 on page 29 then, Stage 1 p. 51 (What's the difference...) Reading: We did Lesson 5 Dictation: We did Dictation 1
F	T----	1	Time Started: 11:00 AM JT Topic: Callan Method Stage 1 pp. 50; Full book Stage 1 pp. 1-33 Next Topic: Fullbook revision; Stage 1 p. What colour..? Reading: None Dictation: None
G	C----	1	START TIME: 11:00AM JT TOPIC: CALLAN METHOD: Stage 1 pp. 45-52 NEXT TOPIC: Full Book Revision (Stage 1) Stage 1 page 1 (What's this?) READING: We did Lesson 5, Lesson 6 DICTATION: We did Dictation 1
H	J----	1	Time Started: 11:00 JT TOPIC: Callan Method Stage 1 pp. 26-34 NEXT TOPIC: Stage 1 p. 34 (Are all the books...?) READING: We did Lessons 1, 2 and 3 DICTATION: None
I	F----	1	Time Started: 11:00JT TOPIC: (Callan Method) Stage 1 pp. 45-50 NEXT TOPIC: Do reading Lesson 6 p.29 then Stage 1 on p. 50 (ANY?) READING: We did Lesson 5 DICTATION: We did Dictation 1
J	P----	1	Start Time: 11:00 JT TOPIC: CALLAN METHOD Stage 1 pp. 50-52 AND FULL BOOK REVISION STAGE 1 pp.1-20 NEXT TOPIC: CONTINUE FULL BOOK REVISION ON STAGE 1 p.21 [WHERE'S THE HOUSE?] READING: We did Lessons 6 DICTATION: NONE

レッスンの基盤となるカランメソッドの特徴のひとつは、教員による高速の質問と、学生の瞬時の回答、その回答を教員がサポートするという流れがセットになり、繰り返されることである。学生の回答は Yes/No や単語レベルではなく、フルセンテンスが求められる。質問の内容は特定の単語や文法に焦点を当てているため、単にリスニング力を鍛える訓練を行なうわけではない。非常に集中した状況において、まずはリスニング力に頼りながら語彙を増やし、さまざまな文法事項を確認し、速やかにフルセンテンスで反応・返答することに努め、のちに視覚的な確認を経て、耳で聞いたことは文字で書きとれるように、口頭で答えたことは文字にもできることをめざした訓練が継続する。

たとえば、Stage 2 の Lesson 23 では、次のような質疑応答が行われる。

教員： What's the difference between "many" and "much"? What's the difference between "many" and "much"?

学生： The difference between "many" and "much" is that we use "many" with things we can count, and "little" with things we can't count.

教員： Give me a sentence with "many" in it, please. Give me a sentence with "many" in it, please.

学生： There are many cars in a large city.

教員： Give me a sentence with "much" in it. Give me a sentence with "much" in it.

学生： I do not put much sugar in my tea.

教員： What's the difference between "few" and "little"? What's the difference between "few" and "little"?

学生： The difference between "few" and "little" is that we use "few" with things we can count and "little" with things we can't count.

教員： Give me a sentence with "few" in it, please. Give me a sentence with "few" in it, please.

学生： There are few tables in this school.

教員： Give me a sentence with "little" in it. Give me a sentence with "little" in it.

学生： I drink little milk.

ここで意図されている学びは、① 2度繰り返される高速の教員の質問や指示を聞き取ること、② それに対して即座に答えられること、③ 質問でもちいられた表現を代名詞などで省略することなく、答えのなかでそのまま再現すること、④ many と much、few と little の違いを文法的に理解して説明することなどである。

どの学生も、常に教員の質問に即答できるわけではなかった。その場合、教員は学生の返答を待たず、自ら回答を始める。学生はそれに導かれ、シャドーイング方式で回答を開始するが、正答が安定したと教員が判断した時点で、シャドーイングの状態を解除し、学生の自主的な発話に任せることになる。教員の質問は常に2度繰り返され、学生の回答は反応の良し悪しに応じて、1度であったり2度であったり、あるいは1度目はシャドーイングをもちい、2度目は独力で回答するなど、教員が最適な方法を選択ながら対話形式のレッスンが進められていった。

カランメソッドの訓練を受けたフィリピン人教員の「高速」の質問とは、実際、英語母語話者が自然に話すスピードよりもかなり速く、分かりやすく語りかけようとする語学学校の教員のスピードの3倍近くにもなると言う。英語母語話者の自然なスピードにおいては、1分間に話される単語数は150から180語、TOEICリスニングテストのスピードは毎分180から190語、イギリスのテレビニュースのアナウンサーで毎分200語ほどであるのに対して、カランメソッドをもちいる教員の発話は、毎分220語から240語である(坂本、2013)。このスピードにより、学習者の緊張と集中を維持し、母語に置きなおして考える暇を与えず、できるだけ多くのインプットを与えることにより、相当のアウトプットを引き出すことを狙うということである。

2. 3 履修学生

Advanced English A/AI は、3年生以上を対象とした選択科目であり、10名^{viii} が履修することを決定した。受講学生の英語運用能力に関する大まかなデータは次のとおりである。

表3：履修学生の英語運用能力（検定等スコアと自己診断）

英語関連検定受験経験と結果								
A	英検 2 級取得、TOEIC 650 点							
B	英検 2 級取得、TOEIC 650 点							
C	TOEFL 460 点、TOEIC 685 点							
D	英検 2 級取得、TOEFL 410 点、TOEIC 440 点							
E	英検準 2 級取得、TOEIC 405 点							
F	—							
G	—							
H	英検 2 級取得							
I	英検準 2 級取得							
J	TOEFL 410 点							
英語力自己診断レベル					英語力到達希望レベル			
	聴く	話す	読む	書く	聴く	話す	読む	書く
A	3	3	4	3	5	5	5	5
B	3	3	2	2	5	5	4	4
C	4	3	4	4	5	5	5	5
D	5	4	4	3	5	5	5	5
E	3	3	3	2	5	4	4	4

F	3	3	3	3	5	5	5	5
G	3	3	4	2	5	5	4	4
H	4	4	3	3	5	5	4	4
I	2	1	3	2	4	4	3	3
J	3	2	3	2	5	5	5	5

表4が示すとおり、すべての学生が15回の授業に出席し、14回のオンラインレッスンを完了したわけではなかった。一部、振替受講が実施されたが、これは、レッスン開始3時間前までに授業への出席が困難であることが判明した場合、振替予約の制度を利用して、授業時間内のレッスンをキャンセルし、授業外の受講に振り替えたケースである。たとえば、学生Bの場合、全14回のレッスンのうち、指定授業時間内に受講したのは6回のみであったが、あとの8回のうちの3回は振替で受講済み、残りの5回は受講の権利を無駄にしたことになる。

表4：オンラインレッスン受講状況

授業 学生	1 4/26	2 5/3	3 5/10	4 5/17	5 5/24	6 5/31	7 6/7	8 6/14	9 6/21	10 6/28	11 7/5	12 7/12	13 7/19	14 7/26	計
A	○	○	○	○	○	振替	—	—	○	○	○	○	○	○	12
B	○	振替	振替	振替	—	○	—	○	—	—	—	○	○	○	9
C	○	振替	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
D	○	○	○	○	○	○	○	○	振替	○	○	○	○	○	14
E	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
F	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
G	○	○	振替	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	○	13
H	振替	—	○	○	○	○	○	○	○	—	○	○	○	○	12
I	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
J	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14

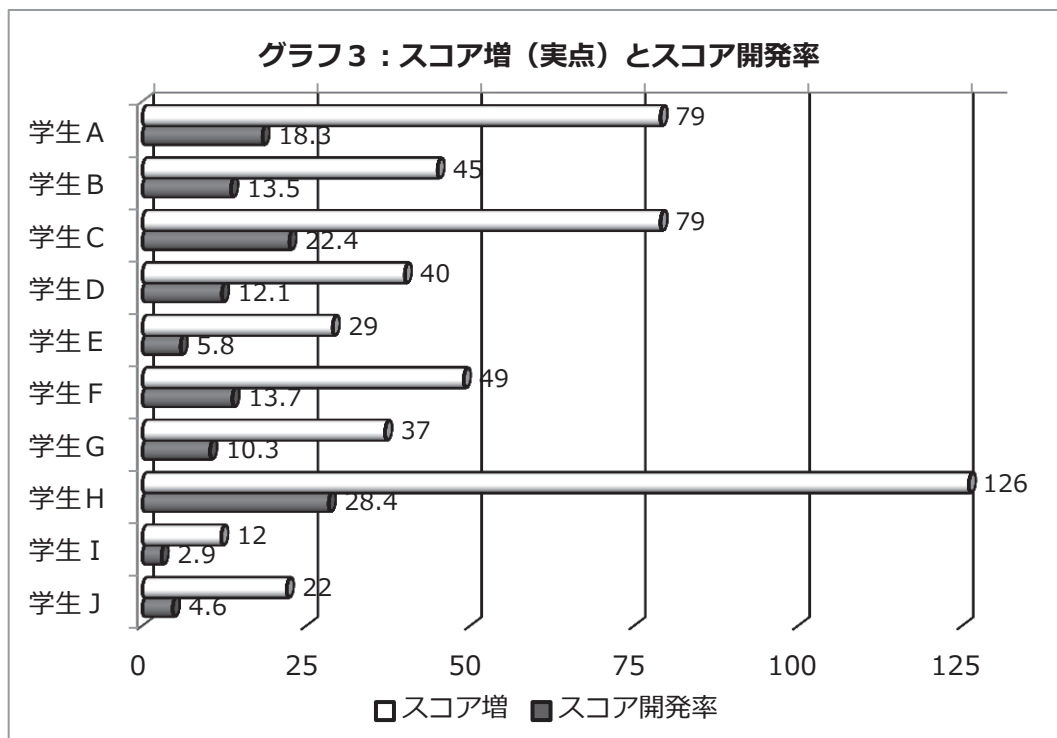
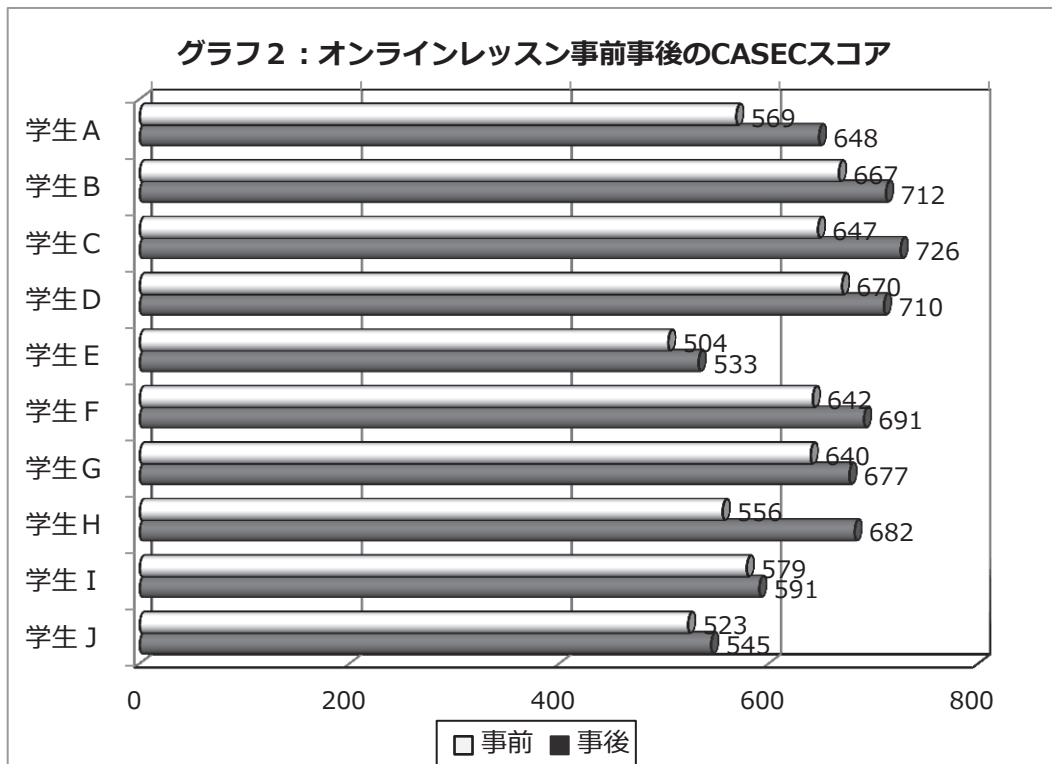
3. 結果

3. 1 CASEC スコアの向上

14回のオンラインレッスンを修了した学生CDEFIJの6名は通算700分、13回の学生Gは650分、12回の学生AとHの2名は600分、9回しか受講できなかった学生Bは450分のレッスンを、変則的な振替を例外として、週に1度ずつ受講した。事前事後に受験したCASECスコアに見る英語運用能力の向上はグラフ2のとおりであった。もっともスコアの伸びが大きかったのは学生Hの126点増、もっともスコアの伸びが少なかったのは学生Iの12点増であった。学生全員のスコアに伸びが認められた。

オンラインレッスン受講前のCASECスコアの高低により、満点1000点に向けた伸びしろが異なるため、坂本ら(2014)に倣い、学生のスコアの変化を実点ではなく、伸びしろに対する伸び率を示すスコア開発率で表す。すなわち、事前のスコアが1000点中500点であった場合、伸びしろは500点であるが、事後のスコアが700点であったとしたら、200点のスコア増が見られたため、 $200/500=40\%$ のスコアの開発があったとみなす。このように伸びしろに対する伸び率の算出結果をスコア開発率と呼ぶ。グラフ3は履修学生のスコアの伸びを、実点とスコア開発率の両方で示したものである。学生Aと学生Cは、実点においてはどちらも79点のスコア増があったが、スコア開発率においては、

事前のスコアが低く（569点）、伸びしろが大きかった（431点）学生Aよりも、事前のスコアが高く（647点）、伸びしろが小さかった（353点）学生Cのスコア配発率のほうが高かったことになる^{ix}。



坂本ら（2014）は、算出したスコア開発率にしたがって、スコアの伸びを分類した。すなわち、ス

コア開発率が 5%未満であった場合を「ゆらぎ」、10%未満であった場合を「微増または微減」、25%未満であった場合を「増加または減少」、50%未満であった場合を「大増または大減」、そして 50%以上の場合を「激増または激減」と呼んだ。本実証実験において、事後のスコアが事前のスコアよりも減少した学生はおらず、「ゆらぎ」2名、「微増」1名、「増加」6名、そして大増1名という結果であった。

3. 2 オンラインレッスンに対する学生の反応

学生は毎回の授業の最後に、教員が提示した設問に回答する形式で、振り返りの記録をつけていた。設問内容は回を重ねるごとに発展的に変化させた部分があったが、レッスンに対する満足度は固定されており、非常に満足 (5)、満足 (4)、どちらとも言えない (3)、多少不満 (2)、不満 (1) の 5 段階で受講したレッスンを評価することになっていた。この 5 段階の評価は、1, 2 年次のスピーキング・リスニング科目との比較において判断するように指示された^x。ただし、何らかの理由で、オンラインレッスン受講後、振り返りレポートを提出することができなかったケースがあった。よって、満足度の記入回数と、オンラインレッスンの受講回数が不一致の学生が含まれている。

前述のとおり、満足度の評価には、全履修学生に共通の指標があったわけではなく、非常に主観的である。比較の対象は、1, 2 年次のスピーキング・リスニングの授業であったが、学生が過去に出会った教員は多様であり、授業の形態も異なるため、どこまで比較による判断ができたかどうか、定かではない。

学生の満足度を下げる要因には、教員の交代が顕著であった。満足度の平均が 4.1 であった学生 A は、第 6 回のレッスンの評価のみが低い。振り返りのレポートに記載された理由は、「先生がいつもと違ったので、リズムが分かりづらかった。どこで、質問に答えるのか、リピートするのかが分かりづらかった」ということであった。ただし、教員交代の理由は、学生が授業外の振替レッスンを受けたことであった。

表 5 : オンラインレッスンに対する満足度

回 学 生	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	平均
A	4	4	4	5	4	2	4	5	5	4	5	—	—	—	4.1
B	4	5	4	5	4	4	4	4	—	—	—	—	—	—	4.3
C	4	4	4	4	5	4	5	4	4	4	4	4	3	—	4.1
D	4	5	2	4	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	4.6
E	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4.0
F	4	4	5	4	3	4	4	4	4	3	4	4	4	—	3.9
G	4	3	3	3	4	3	3	3	3	3	4	4	—	—	3.3
H	4	4	4	4	4	5	5	4	4	4	5	5	—	—	4.3
I	4	4	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	4.8
J	4	5	4	5	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	4.6

学生 C は、第 13 回を 3 と評価している。その理由を、「いつもと違う先生で、あまりうまく聞き取れなかった。先生の英語はよかったと思うが、話すのが早かった。先生が違ったので雰囲気がいつもと異なり、レッスンの進め方も違ったので難しい気がした」と記録している。

学生Dの満足度は比較的高いのであるが、第3回が目立って低い。この学生は、「通信環境が今までに比べて悪く、聞き取りにくかった。今回は何の連絡もなく突然の先生の変更とともに通信環境も悪かったので、非常にレッスンが困難だった。また、今回の先生は通信障害や自分がうまく答えられなかったときに、ものすごく態度で表す先生だったので、レッスンをされていてすごく焦った。自分の中で lesson 9 までは進めるようにと予習復習をしていたので、今回はすごくがっかりした。先生の変更がある場合には事前に伝えてほしい」との不満を訴えている。

また、留学生FとGの満足度は、他の日本人学生のものよりも低かった。2名のレポートには、カランメソッドの特色であるコントロールされた対話形式に対する不満が表れており、もっと多様な話題のもとに、自由な会話をしたかったと記録されている。

学生は14回のオンラインレッスン終了後、自分の経験を振り返り、自由に感想を記載した^{xi}。なお、これを記載した時点では、まだCASECの事後受験を行なっていなかった。

学生A：Callan Methodのような学習方法で英語を学んだのは初めてでした。一文一文しっかりと、文法通りに話すことを今まで意識していなかったのが難しく感じましたし、今までどれだけ意識せずに話していたかがわかりました。そのような点では、自分の英語を見直すきっかけになりよかったです。また、自分の生活のなかに少しでも英語を取り入れることができたので、受講してよかったと思っています。しかし、このレッスンは毎回テキストをこなし、決まった英文を繰り返すので少し飽きてしまうこともありました。レッスンに加えてフリートークができれば尚よかったかなと思いました。CASECも受けさせてただけで、自分の英語力を見直すことができました。ありがとうございました。

学生C：貴重な体験でした。オンラインだけでなく、フィリピンの現地校でさらに英語を学びたいと思いました。先生はとても指導が上手でした。

学生D：最初はオンラインで受ける英会話レッスンははじめてで、通信の不具合や先生との相性で戸惑うこともありましたが、今日総復習してみて、以前の文がスムーズに答えられるようになっていたことに驚きました。Callan Methodでは自分のペースで目標を持って進められるので、できれば継続したいと思います。

学生E：1回目と比べるとリスニング力は上がったと思いました。また、英語を聞いて、英語のまま理解することが少しできるようになったと感じました。短い期間でしたが毎週やることで英語を話す苦手意識が減りました。このレッスンをやって、とてもよかったです。

学生F：Callan レッスンでは自分の英語を練習できて、いい機会になりました。色々な勉強を通じて、忘れてしまった英語や知らなかった英語も勉強できました。レッスンを何度も繰り返してくれたので、とても頭に入ります。でも、内容は大学生にとってちょっと簡単すぎる気がします。もし、もっと日常生活や仕事のためのような英会話をしたらもっと役に立つと思います。

学生G：この授業では勉強したことをもう一回練習することができました。それに、英語の会話を勉強しました。一對一のレッスンはいいですが、内容は大学生にとってちょっと簡単だと思います。ほかに、教え方はあまり面白くないです。学生に自分で答えさせたほうがいいと思います。この方法で学生は勉強したことを本当に分かるかどうか自分でチェックすることができますから。1回から14回までのなかで、今回は一番いい授業だったと思います。先生はとても元気で、発音もとてもうまいので、この先生から色々な正しい発音を勉強しました。

学生 I : とても大変でした。慣れたからもあるかもしれませんが、最初のころよりはできるようになったと思います。今回このレッスンを受けることができてよかったです。

学生 J : 私にとって初めてのオンライン英会話がこの **Callan Method** でした。14 回のレッスンを終えて、得られたことを 3 つ挙げるとすれば一つは、発音の上達です。毎回フィリピンの方の英語を追いながら真似をしていくので、子どもが言葉を覚えるときのように、この真似というのが英会話上達の鍵になったのではないかと思います。二つ目は、間違いを恐れることが怖くなくなったということです。レッスンの最初の頃は、先生との英会話で間違えてしまうと心に大打撃をくらっていたのですが、先生は間違った私の英語を正しつつも、褒めてくれることが多いので、レッスンが進むにつれて、たくさん間違えて直していけばいいと思えるようになりました。三つ目は英会話の楽しさを感じたことです。英会話できているといえるほどの力は私にはないですが、だからこそレッスンで感じた“聞き取れない、うまく言えない”というもどかしさや悔しさをばねに、今後も勉強に励み、外国人と難なく英会話できる力を身に付けようと思いました。

4. まとめと課題

14 回にわたるフィリピン人教員によるオンライン英語レッスンの結果は、次のとおり、まとめることができる。①履修学生は 450 分から 700 分のレッスンを熱心に受講し、全員が CASEC を通じて、一定のスコア増とスコア開発率を達成した、②科目担当教員は、プログラムのシステムと事前事後指導を通じて、学生の学習状況を把握し、必要な技術的・心理的指導を与えることができた、③学生のレッスンに対する満足度は、おおむね良好であった。

上記①(履修学生は 450 分から 700 分のレッスンを熱心に受講し、全員が CASEC を通じて、一定のスコア増とスコア開発率を達成した)については、学生全員が CASEC が示す英語運用能力を向上させたという結果に至ったという事実があった。ただし、上述のとおり、本実証実験における英語運用能力テストの導入は、スコアの向上を目的としたものではなかった。レッスン実施前の CASEC の受験により、本授業の到達目標の一部であった「すべての学生が、英語運用能力について、現在の立ち位置を認識し、そこから向上することをめざす」ことを実現し、レッスン実施後の再度の受験により、「そのテストの受験対策をすることなく、「話す力」を集中的に伸ばす訓練をすることを中心に、語彙の増強や読解力の向上も結果的にめざすような形で、総合的な英語力を高めることを目標とする」ことが達成されたことを確認するひとつの手段とした。CASEC の事前事後のスコアをもちいて算出したスコア開発率に対する認識も同様である。

同時に、履修学生らの英語運用能力を向上させる機会は、この授業時間外にも多様に存在していたはずである。したがって、学生の視点から言えば、オンラインレッスンの効果が標準化テストスコアに表れたというよりも、スコアの向上が、毎回のレッスンのなかで個々の学生が徐々に感じとっていた主観的な「手応え」を結果的に補強するものとなったと理解している。レッスン終了後に学生が事由に書いた感想のなかにも、新しい学習方法を通じた学びが記載されており、「それぞれの立ち位置からの向上」が認められたと考えている。

上記②(科目担当教員は、プログラムのシステムと事前事後指導を通じて、学生の学習状況を把握し、必要な技術的・心理的指導を与えることができた)は、科目担当教員のオンラインレッスンに対する高い関心と、学生の学習に対する責任感から実行されたものである。インターネットをもちいた個別化された英語学習は、ともすればやりっ放しになる可能性があるが、学習が個別化されているだけに、個々の学生の学習状況をできる限り把握し、不調なときのサポートと好調なときの奨励が必要

であるとする。特に、日本語をもちいないレッスンの事前事後に、必要に応じて英語のみならず日本語による何らかのサポートを与えることにより、集中と緊張が非常に高いレッスンを補完することが可能であった。

上記③（学生のレッスンに対する満足度は、おおむね良好であった）は、レッスン前後の学生とのやりとり、および事後の振り返りの記録から明らかになった。満足度という点では、当初、筆者は、フィリピン人英語教員に対する学生の反応に多少の懸念をもっていたが、同時に、フィリピン人教員に対する否定的・消極的な考えをもつ学生（がいたとすれば）は履修しなかったとも想定されていた。それでも、フィリピン人教員と英語を学ぶ経験を履修前にもっていた学生は皆無であったため、実際のレッスンのなかで予期せぬ反応が現れても不思議ではなかった。結果、フィリピン人教員と日本人学生という、国際的な対面式の環境のなかで、学生は教員に敬意を表し、教員の指導力や発音も含めて、高い満足感を得ることができた。

ただし学生は、2点の不满要因を提示した。ひとつは、教員の交代に関することである。基本的に教員は固定であり、教員は学生の進捗や特徴を把握したうえでレッスンを展開した。学生は教員の指導に徐々に慣れていき、精神的な安定を得ていたが、学生や教員の事情により教員が交代すると、学生は安定が揺るいだと感じ、また比較対照の材料も得ているため、強い不満を表す者がいた。教員は基本的には同じ指導法のトレーニングを受けており、指導の質に優劣はつけがたく、そして何よりも、実践的なコミュニケーションの場面を考えれば多様性は常であるため、学生に対しては教員の差異に気を取られないようにと伝えるにとどめた。

もう一点の不满要因となった、自由会話の時間が少ないという点は、特に留学生に顕著であったが、出身国における経験とも関係があるため、ここでは詳述を避けたい。QQ English に対しては、学生の好みや性格に応じた運用上の工夫として、自由会話の時間の増加を要望することも可能である。QQ English が日本人の経営による語学学校であるため、フィリピン人教員にはある程度の日本理解が備わっており、ウォーミングアップやクロージングのなかで、そしてレッスン途中の教員による例示においても、日本の物事に関する多少の言及が認められた。さらにフィリピンの文化理解につながるようなやり取りが含まれれば、異文化理解の材料が加わるという意味でも有意義かもしれない。ただし、カランメソッドはこのことについて、次のとおり、指導方針を明示しているため、慎重な検討が必要と思われる。

Although the Callan Method involves a lot of speaking practice, this does not mean chatting (free conversation). When people chat, they only use the words and grammar that they already know, so they do not learn much. In a Callan Method lesson, you are constantly using new words and structures when you speak, so you benefit more. No time is wasted. (<https://www.callan.co.uk/the-callan-method/for-students/>)

5. おわりに

日本の大学生のほとんどが、専攻に関わらず、多かれ少なかれ、英語との関係をもちつづけながら卒業し、社会に出ていく。国外に限らず、国内においても英語の必要性が高まっている今日、社会人として活動するうえで、どのような分野の英語が必要となるかということは、大学生が想定することは難しいであろう。それならば、どのような専門分野で英語をもちいることになるだろうとも、基本的

な運用能力とコミュニケーション力を実践的な学習によって身につけることは大いに可能であろう。

同時に、学生に必要となるべきものは、英語運用能力に加え、世界各地における国際コミュニケーションのための英語使用の現状に関する認識であろう。誰が、何の目的で、どのような英語をどのようにもちいているかという視点から、特に近隣アジア諸国における英語使用を認識することは、将来、国際社会において英語を実践的にもちいるときに、心理的にも有効である。本実践研究において、フィリピン人の英語教員に対する違和感が報告されることはなかったことは幸いであったが、国際コミュニケーションのための英語に関して、論理的にも実践的にも多様な英語に触れることは、学生の将来的な英語使用に対して、非常に有効である。そのような意味で、アジアの英語の一種である上質なフィリピン英語に関わる経験に大きな意義を感じている。

小学校への英語指導の導入時期に関しては、他のアジア諸国との比較において、遅れをとってきたという事実がある^{xii} が、日本の英語教育のシステムは、小学校から大学まで、綿密に整備され、質の高い教育が実践されている。問題は、多くの英語学習者にとって、学習内容を実践的に日々活用することのできる多言語・多文化の環境が乏しく、世界各地で国際コミュニケーションにもちいられている多種多様な英語に直に接する機会も乏しく、ゆえに異文化間コミュニケーションの実践的な経験も豊かではないということである。このことは、英語学習者だけの問題ではなく、学習者から指導者へと育った英語教員の問題でもあると言えよう。本実証実験の結果とそこから提示することのできる課題は、そのような日本固有の外国語学習を取り巻く問題の解消に寄与し、学習者へのより豊かな学びの機会の提供に貢献する方策のひとつとして、意義のある試みであったと確信している。

参考文献

Callan, R. K. T. (2014). *Callan Method Student's Book—Stage 1, Stage 2, Stage 3*. Cambridge, UK: Callan Method Organisation, LTD.

Callan Method Organisation. <https://www.callan.co.uk/>

Gary A. Cziko, G. A. & Park, S. “Internet Audio Communication for Second Language Learning: A Comparative Review of Six Programs.” (pp 15-27). *Language Learning & Technology*, 7(1). Retrieved September 15, 2017, from <http://lt.msu.edu/vol7num1/review1/default.html>

坂本美枝. (2013). 『カラン・メソッド「英語反射力」を鍛える奇跡の学習法』東洋経済新潮社.

坂本美枝、半田純子、宍戸真、阪井和男. (2014). 「カランメソッドを用いた英語発話練習：オンライン・マンツーマン指導」日本教育工学会第30回全国大会.

坂本美枝、半田純子、宍戸真、阪井和男、新田目夏実. (2016). 「発話練習における学習者の内省分析」(pp. 1-11). 日本英語教育学会編集委員会編集、早稲田大学情報教育研究所発行『言語学習と教育言語学 2015 年度版』.

文部科学省. (2009). 「第3章 主として専門学科において開設される各教科 第13節 英語」(pp. 289-291). 『高等学校学習指導要領』

文部科学省 産学連携によるグローバル人材育成推進会議. (2011). 『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』

-
- i Computerized Assessment System for English Communication (CASEC)は、公益財団法人 日本英語検定協会が基礎開発し、現在、株式会社 教育測定研究所が開発・運営しているインターネット上で受験できる英語コミュニケーション能力判定テスト。4 セクションから成り、セクション1では語彙、セクション2では表現力、セクション3では大意把握力、セクション4ではリスニング力を測定する。ほとんどの学生が40分から50分程度で受験を終了する。本学では、2006年秋より、2006年度4月入学生の2年次基礎英語進度別クラス編成のためにCASECの利用を開始し、それ以降、2010年秋まで、同様の目的で春と秋に利用した。<http://casec.evidus.com/about/>
- ii 実際には、QQ English 社がカランメソッドにしたがって指定した教科書を使用した。
- iii 紙幅の都合により、本稿では省略した形で提示した。
- iv 具体的には、オンラインレッスンの部分は、実証実験講座として株式会社内田洋行より提供された。内田洋行は、学校分野、特に中高、大学分野においてQQ English と協業しており、実証実験の実施や教材開発等をQQ English と共同で実施している。
- v 実際には、学生によっては欠席回があったため、全員が14回のオンラインレッスンを受講したわけではなかった。
- vi ただし、授業外のオンラインレッスン受講や、授業時間内の記入時間不十分などが理由となり、オンラインレッスンは受講したが、振り返りシートの提出がなかったという事態も生じた。
- vii ステータス2は、受講予定であったが、Skype のログインを確認できなかったことを意味する。
- viii 内訳は国際コミュニケーション学科4年生2名、3年生4名、人間科学科3年生2名、留学生2名。
- ix 学生A：事前スコア569点、事後スコア648点、1000点-569点=431点、79点/431点=18.3%
学生C：事前スコア647点、事後スコア726点、1000点-647点=353点、79点/353点=22.4%
- x ただし、2名の留学生（学生FとG）は本学における1、2年次の学習経験をもたないため、特に比較の対象を設定せず、自由に評価してよいことになっていた。
- xi 学生BとHは、感想の提出の機会をもつことができなかった。
- xii ただし、早期英語教育導入の是非については、場をあらためて慎重に議論する必要がある。